



Title	武者小路実篤における 生長 の研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	吉本, 弥生
Citation	北海道大学. 博士(文学) 乙第7165号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/87169
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Yayoi_Yoshimoto_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 吉 本 弥 生

主査 教授 中 村 三 春
審査委員 副査 教授 水 溜 真由美
副査 教授 谷古宇 尚

学位論文題名

武者小路実篤における〈生長〉の研究

・当該研究領域における本論文の研究成果

『白樺』派を主導した作家、武者小路実篤の文学と思想の根幹をなすものが、その評論集『生長』の題名にも示された精神的・人格的な〈生長〉の理念であることは、従来の研究においても既に指摘されてきた。それに対して本論文は、これまで文芸・宗教・思想さらに現実的実践の各分野ごとに追究されてきたこの〈生長〉の理念を、多数の作品を俎上に載せ、横断的かつ総合的な究明を行うことにより、その全体像を明らかにした点を最大の研究成果とするものである。

具体的には、(一)『荒野』『わしも知らない』『人間万歳』『桃色の部屋』『その妹』『友情』などの代表的な小説・戯曲・評論を対象とし、キリスト教・仏教・儒教などの精神を独自に融合した人格主義である、武者小路における〈生長〉の理念の形成過程を明らかにしたこと、(二)『二宮尊徳』『大石良雄』『井原西鶴』『孔子』『釈迦』『耶蘇』『トルストイ』などの多数に上る武者小路の伝記小説を、初めて総体的にとらえ、それらに現れた〈生長〉の理念を検証したこと、(三)武者小路の宗教観・社会観・芸術観を、トルストイ・社会主義・内村鑑三・リップス・阿部次郎・ロダン・『論語』等との関わりの中で丹念に見定め、その〈生長主義〉と〈精神的非暴力主義〉を解明したこと、(四)さらに「新しき村」の実践をも、芸術と労働とを融合し、〈生長〉を実現するための道筋として定位したことが、研究成果上の重要な柱として認められる。

このうち、第一に、武者小路が作家としての生涯に互って書き続けた伝記小説については、研究史上、他の一般小説・戯曲・評論が多々論じられている中で、それらを全体として究明した先学がなく、ほぼ新機軸の研究と言わなければならない。第二に、『論語私感』などによって示された儒学への傾倒と、特に朱子学的な思想が武者小路に多大な影響を与え、作品の基底に据えられてきたことも、従来、ほぼトルストイやマーテルリンクらの西洋文学の受容の観点からのみ評価されてきた武者小路研究にあっては、初めて本格的に主張される論点である。

これらのことが、全集未収録作品を含む資料に基づいた適切な実証と、相当の説得力を伴って詳細に追究されていることから、本論文は武者小路研究の領域において、高い研究成果を上げたものとして評価できる。

・学位授与に関する委員会の所見

本論文は武者小路の多数の作品の分析と解釈に基づき、その文芸・宗教・思想・実践を一貫する概念としての〈生長主義〉と〈精神的非暴力主義〉を論じ、その過程において、東西の多岐に互る諸家の思想を独自に解釈し、それらを融合・統一することによって、個人の精神を尊重する姿勢、

他者との共鳴、人格を人類愛と結びつけようとした武者小路の文学と思想を解明したものである。就中、従来研究の及んでいない伝記小説を初めて総合的に検討した点と、その作風と思想の基盤に儒学の独自の受容が存在したことを実証した点において、これまでの武者小路研究に照らして、本審査委員会は本論文を高い水準にある研究として評価するものである。日本近代文学史における重要な作家として認識されてきた武者小路の文学と思想について、新たな観点からの理解と再評価を進めるために大きな貢献となるものである。

ただし、膨大な作品を残し、洋の東西に亙る幅広い教養を一手に引き受けた武者小路の全体像を明らかにしようとする試みだけに、幾つかの問題点も審査において指摘された。すなわち、(1) 様々な思想を融合・横断して自らの〈生長主義〉に統合した武者小路の営為を、その発動者側の思想に即して妥当性を検討する姿勢がいささか希薄であること、(2) 人格・社会・宗教などを貫く〈生長〉の概念を根底に置く芸術観を「芸術至上主義」と見なすことに違和感があること、(3) 〈精神的非暴力主義〉を主張したとされる武者小路が、太平洋戦争を肯定した『大東亜戦争私感』などの著作を研究対象に含めておらず、その点で不十分の感があること、(4) 儒学・朱子学を基礎に据えたとする思想の、現代における実際的な有効性についての検証が少ないこと、(5) 総じて武者小路の文学・思想について、基本的に肯定的な立場に終止しており、今日的な観点から批評的・批判的に吟味する態度が乏しいことなどである。しかし、これらの諸点は本論文全体の達成度を損なうものではなく、申請者が今後も引き続き武者小路に関する研究を継続し、研究を発展させることによって解決すべき課題である。

本審査委員会は、以上のような審査結果に基づき、全員一致により、本申請論文が博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものと判断した。